

日風園

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第106号 令和元年(2019)7月1日

資料見聞

テレビ

今では空気の一部と言っても良いほど日常化しているテレビですが、日本で放送が始まったのは、昭和28年(1953)のことですから、今から約60年前のことでした。県内では昭和33年12月にNHK、民放ではRKC高知放送が昭和34年4月に開局しています。

昭和34年9月発行の『高知年鑑1960』には、「テレビブームの影響で本県のテレビ台数も八月現在で約九千台を突破」「その裏面では映画館の打撃」。NHKは「テレビの恩恵に浴しえない人々のために、高知市中央公園にテレビを据え付け、広く一般に

公開するとともに、高知新聞社では辺地の小、中学校にテレビを寄贈して、テレビ文化の向上に努力している」とあります。昭和36年10月の『高知年鑑1962』では、テレビ受信契約台数は約3万2千台、普及率15.3%とぐんぐん延びていることがわかります。ただし県全域に一気に放送が始まったわけではなく、昭和36年に中村、37年須崎、38年佐川、39年に安芸と順次放送エリアが拡大していきました。昭和39年10月からはNHK高知放送局がカラー放送を開始しています(『高知年鑑1966』)。

昭和39年の『高知年鑑65』は、民放の人気番組として「鉄腕アトム」「鉄人28号」「エイトマン」「狼少年ケン」を掲げていますが、民放1局の高知で

どれくらい放送されていたのでしょうか？民放として二番目に開局したKUTVテレビ高知の放送開始は昭和45年(1970)、三番目のさんさんテレビは平成9年(1997)のことでした。白黒テレビは、電気洗濯機や電気冷蔵庫と並んで「三種の神器」と称され、急速に普及しました。最初は海外ドラマも多かったのですが、スポーツ中継、歌番組、テレビまんがなども人気を博しました。テレビまんがの人気はまんが週刊誌の隆盛を支えました。日本のアニメは海外でも高く評価されていますが、その出発点の一つはテレビまんがにあったと言えるでしょう。現代に続くウルトラマンや仮面ライダーなどのヒーロー番組も、それぞれ昭和41年(1966)、46年に始まったものです。そしてテレビに映し出される歌手や芸能人は、アイドルと呼ばれ、若者を中心に支持されました。日本独自のカルチャーを育んだのもテレビでした。民放のテレビ番組の合間に繰り返し流れるコマーシャル映像は、国民の消費行動に強い影響を与えました。パソコンのモニターで配信される映像を見ることのできる現代では、テレビの特権的な地位も弱まってきたように思います。ここいらで、テレビとその番組の歴史を振り返ってみるのも良いのかも知れませんね。



個人蔵
テレビ(NECインスタントビジョン)
NEC(日本電気/新日本電気)の白黒テレビ。それ以前のテレビは、スイッチを入れて画面が出るまで30秒ほどかかったが、瞬時に画と音が出ることからインスタントビジョンと名付けられた。
16-J1が昭和39年(1964)なので、16-F1の本機は昭和38年頃か？

梅野

企画展 「昭和から平成へくらしのうつりかわり」

会期：令和元年7月19日(金)～9月16日(月・祝)

梅野光興

2019年5月1日から新元号・令和が始まりました。元号が新しくなっても何も変わるわけではないと思っ

ていましたが、不思議なもので「平成」が少しずつ昔になり、昭和にいたってはどんどん遠のいていくようです。

■現代をどう残していくのか？

歴史民俗資料館の使命は、高知県の歴史や民俗を後世に伝えることです。民俗部門でも開館以来、失われ行く習俗や民具の紹介に務めてきましたが、高度経済成長期以降の資料は参考のために展示するくらいでした。

ところが、気がついてみると戦後から70年が過ぎていきます。昭和も「歴史」になってきました。戦後のくらしも高知県の歴史であることには違いありません。高度経済成長以降の大量生産・大量消費の暮らしの道具に地域的な特色はほとんど見られませんが、それが県民の実態であれば、一定の資料は将来に残すべきでしょう。それらのモノたちは私たち自身の歴史の一部でもあるのですから。ただし、新しい物を買ったら古い物を捨ててしまう現代社会では、古い民具より昭和の白黒テレビや

洗濯機を探す方が困難だったりするのですが。

■高度経済成長期以降の生活文化の変容

今回の企画展では、主に高度経済成長期以降の生活の変化を取り上げます。高度経済成長の時期については諸説ありますが、昭和30年(1955)からオイル(石油)ショックの昭和48年(1973)頃までを指すことが多い

ようです。この時期は、石炭から石油へエネルギーの主役が交代し、合成繊維やプラスチック、電化製品などの新素材・新技術による製品が増加しました。スーパーマーケットの登場で商品の流通形態も大きく変わりました。

展示室には「三種の神器」などと呼ばれる電気洗濯機、電気冷蔵庫、白黒テレビをはじめ、電気扇風機、電気掃除機、電気ポット、ジュースナーなどの電化製品、台所や食卓の風景を変えたアルミ鍋や蒸し器、プラスチックの水切りザル、ガラス製の小鉢やグラスなど新しい素材の用具を展示します。

これらの新しいモノたちは日本人の暮らしを一変させました。高知県でも多少の時間差や地域差はあれ、変化の

波はやってきました。現在の日常生活はこの頃に到来した生活様式を基本にしていますが、そうなったのはたかだか60年に過ぎないことに驚かされます。農林漁業においても動力化や機械化

が進んだことから、余った労働力は都会へ流出し、急成長を遂げる日本の第二次産業を支えました。地方の過疎が問題になったのもこの頃でした。現在、数百年続いたムラ(集落)がどんどん無住になっていますが、それも高度経済成長がきっかけでした。

豊かな生活が生まれた一方で、急激な工業化や都市化は自然破壊をもたらした。公害などの問題を生み出した。その影響の大きさから、高度経済成長を日本の歴史の中でも大きなターニングポイントのひとつだと言う歴史学者もいます。

■メディアに支えられた文化

物語や音楽、舞踊などの娯楽は、かつては実際に見たり、聞いたり、自分たちで演じたりするのが主でした。ところが、蓄音機の普及により、家庭で音楽や浪花節などのレコードを聴く習慣が広まっていきました。高知県では昭和7年(1932)に始まったラジオ放送も後のテレビと同様、ニュースなどの情報伝達とともに、音楽や物語など娯楽のメディアでもありました。フィルムで上映する映画は大正時代か

ら昭和初期にかけて次第に娯楽の花形になっていきました。大衆雑誌の増大にともなう大衆小説の普及も大正期のことです。生の上演ではなく、複製文化の娯楽が近代以降の特色です。

展示の後半では、娯楽やメディアの移り変わりを通して、昭和後期から平成への変化を振り返ります。

戦後まもなく、戦前から続くラジオや雑誌や映画が娯楽の中心でした。ラジオで人気の出た「笛吹童子」が映画化されたことなどはその典型でしょう。

紙芝居は、鉛を買ってくれた子ども前で、手描きの絵をめくりながら物語を展開するもので、劇画やマンガ週刊誌のルーツでありながら、実際に人間が上演するという興味深いものです。マンガ週刊誌やテレビアニメが発達する昭和40年代(1965～74)に街頭から姿を消しましたが、本展ではその貴重な実物を紹介します。

さまざまなメディアの中で戦後文化を象徴するのは、何と言っても昭和30年代に広まったテレビでしょう。テレビは、ニュースはもちろん、ドラマやマンガ、スポーツ、バラエティ、歌謡番組など、チャンネルをひねるだけでさまざまな情報と娯楽を提供し、「一億総白痴化」と揶揄されながらも、家庭の中心を占めるに至ったのです。



電気釜 (炊飯器)・ジャー・魔法瓶

それまで御飯はカマドで羽釜を使って炊いていたが、昭和30年に東芝が自動で炊ける電気釜を発売することで、炊事場の風景は大きく変わった。ジャーや魔法瓶の普及も高度成長期である。



金属・プラスチックのザル

食器用のザルはかつては竹やシダ製だったが、金属製やプラスチック製が出来た。



ガラスの器・グラス

見るからに涼しげなガラスの器は夏向けの食器として広まった。



ランドセル

小学校の通学用カバン。全国的に普及したのは高度経済成長期以降との説がある。



地球儀

球形に世界地図を貼り付けた立体模型。子供の学習教材の一つ。



電気スタンド

机の上などに置いて手元を明るくする照明具。電球式と蛍光灯式があった。

女の子の服



ステレオ

ラジオ体型のステレオ。ビクター製。1960年代に流行したタイプと思われる。



キューピー人形

アメリカ生まれのキューピーは、日本ではマヨネーズの会社のマスコットとして普及した。



紙芝居

戦後もテレビの無い時代に子どもたちの娯楽の一つだった。

昭和40年代はウルトラマンや仮面ライダー、魔法少女物やロボットアニメなど今につながる子ども向け作品が誕生・定着した時期でもありました。マンガ週刊誌に大人向けの内容の物が増え、大人になってもマンガを卒業しない若者の登場が驚かれました。ここから日本のマンガの多様化と大発展が始まります。昭和50年代にはテレビアニメに若者向け作品が生まれ、アニメブームが到来します。平成期に海外でも評価されるようになったコンテンツの誕生もこの時期でした。

テレビは歌謡曲も変えました。アイドルの出現です。ルックスや派手なダンスに若者が熱狂しました。アイドルはまさにテレビの申し子と言えるでしょう。レコード会社作り上げた歌手やスターではなく、自ら作詞作曲した歌を歌うロックやフォーク、そしてニューミュージックの流行も昭和40年代のことでした。

高知県では店舗や映画館、テレビ局の数や種類において東京などの都会には及ばないものの、これらの文化はメディアによって流入しました。

企画展では当時の映画ポスターやマンガ、アニメ雑誌などを展示し、新しい文化の勃興をたどります。

昭和後半から平成へ

1973年のオイル（石油）ショック

クでそれまでの経済成長がストップした後は、1990年頃のバブル景気をピークに日本経済は停滞していきます。昭和後半の文化を牽引したのがテレビであれば、平成は、コンピュータ・ネットワークや携帯電話などの情報通信機器の時代でしょう。無限とも言える情報がネット上を行き交うことで、家族や同時代の人々が限られた同じ文化を共有していた時代は終わり、情報・娯楽の個人化が進みました。

展示の最後にワープロやゲーム、携帯電話などを展示します。今は珍しくないこれらの物も数十年後には歴史を物語る資料になるはずです。

他にも、ランドセルや算盤、「なつのこども」などの学習用品や、電車やバスなど交通関係資料、そして報道写真や、昭和の香りを残す高知市旭地区の写真も展示します。近い過去を思い出すためにぜひご来館下さい。



エイトマンのセルロイドお面
©平井和正・桑田二郎・TBS

「エイトマン」は昭和38年、日本初の連続テレビアニメ「鉄腕アトム」の10ヶ月後に放送が開始されたSFアニメ。

高知県立美術館夏の定期上映会 「怪奇と恐怖の饗宴」

「怪奇大作戦」「恐怖劇場アンバランス」特集

（巴谷プロが描いた50年前の日本）



企画展「昭和から平成へ」に関連して、高知県立美術館では昭和43（45年）に巴谷プロが製作した「怪奇大作戦」と「恐怖劇場アンバランス」の上映会が行われます。巴谷プロは、ゴジラなど東宝の特撮映画で知られた特撮監督の巴谷英二が創始した会社で、怪獣や巨大ヒーローが活躍する「ウルトラQ」「ウルトラマン」「ウルトラセブン」などのテレビ番組を製作。昭和41年から放送されると、全国に怪獣ブームを生み出しました。いずれも娯楽作品でありながら、SF的発想を活かした社会風刺や人間ドラマが続出し、今なお高い評価を得ています。「怪奇大作戦」は、その巴谷プロが「ウルトラセブン」に続いて、怪獣や巨大ヒーローを排し、直球勝負で人間と現代社会に挑んだ作品です。人形が人を襲う「青い血

の女」、開発に揺れる落人伝説の村「霧の童話」、顧みられない文化への想いあふれる「京都買います」など、テレビ番組と思えない密度と完成度で、自然破壊や動機なき殺人など現代にもつながる問題がシビアに描かれています。「恐怖劇場アンバランス」も、昭和44（45年）に製作された作品で、劇作家・唐十郎を主演に迎えた「仮面の墓場」、ある会社員の悲哀「サラリーマンの勲章」などが上映されます。過去の映画やドラマは、当時の風俗に加え、その頃の考え方や思いが詰まったタイムカプセルのようなものです。懐かしい風景を見て作品を味わいながら、それほど変わっていない社会の問題を見つめ直してはいかががでしょうか？

「昭和から平成へ」展の半券提示により、この上映会を前売り料金（一般 当日1200円→1000円、高校生以下600円→500円）でご覧いただけます。また、上映会の入場券（半券可）で、本企画展を団体料金（大人510円→410円）でご覧いただけます。

高知県立美術館
高知市高須353-12
☎088-1866-18000
FAX088-1866-18008

コーナー展「陸軍歩兵第44連隊とその時代」から 日露戦争に従軍した歩兵第44連隊所属兵士 高橋正樹さん

石畑 匡基

旧陸軍歩兵第44連隊とは、明治29年（1896）に愛媛県松山市において発足し、その後、高知市朝倉に兵営を置いたため、高知県の郷土部隊とされた連隊です。高知県内で徴兵された人の多くが朝倉兵営に入営しました。

この歩兵第44連隊にまつわる史料を3階のコーナー展で8月1日より展示します。今回は、その展示資料から、当館初公開となる、歩兵第44連隊に所属し、日露戦争（明治37～38年）に従軍した兵士・高橋正樹さんにまつわる資料を中心に紹介していきます。

正樹さんは、現在の高知市土佐山で明治16年（1883）に生まれ、20歳で徴兵入隊し、翌年から勃発した日露戦争に従軍しました。入営後に撮影したとみられる写真が残っています。この写真は高知市本町の写真館で撮影されたものです。しばらく、親兄弟と会えないため、入営日前や、そこでの生活に慣れてから、写真を撮影する若者が多かったようです。遠方からの入営者には親や親戚が付き添って朝倉周辺の飲食店で盛大な宴を催すこともあったようです。しかし、軍隊生活には大

きな不安が伴ったことでしょう。正樹さんも同じだったようで、『軍隊実務入営者心得』という本が資料の中に残されています。これはいわば軍隊生活の攻略本であり、ひよつとすると我が子を心配した両親が買いつけたのかもしれない。入営した日から、若者たちには「日課」と「服従」を基礎とした厳しい訓練が課され、兵士へと鍛えあげられていきました。

さて、正樹さんは実際に日露戦争に従軍することになります。歩兵第44連隊が所属する歩兵第11師団は激戦地の一つである旅順総攻撃に参加しました。計3回行われた総攻撃で1万5000名あまりの日本兵が戦死したと言われています。8月21日の第1回総攻撃において負傷した正樹さんは9月に一時帰国し、香川県善通寺に置かれた陸軍



高橋正樹さんの写真
(高橋加代子氏蔵)



高橋家に残された書簡 (高橋加代子氏蔵)

病院で治療に専念しました。その途次の多度津港から、父・寅之助さんに送った手紙が残っています。手紙の中で、自らの戦果を報告するとともに、次のような内容を記しています。

内地の方へ帰りよります。幸いな負傷なので安心してください。帰国したからは元の連隊（朝倉兵営カ）へ帰るので、帰ったら面会にお出でください。私も秋が終わるころには朝倉へ帰ることになるでしょう。

手紙からは、高知県、とりわけ故郷・土佐山に帰りたいという気持ちが見取れます。ところが、正樹さんは二度と故郷の地を踏むことができませんでした。完治すると、再び戦地へと送ら

れ、翌年1月2日には旅順陥落を体験しますが、2月24日に現在の中国遼寧省での激戦により負傷し、その傷が原因で、4月19日に亡くなられます。土佐山には昭和になって新しく造り直された墓がいまも大切に守られています。正樹さんの遺族のもとには、上の手紙のほかにも、正樹さんが書いた手紙に加え、父の返事など数十通が残されており、大切に保管されています。今回のコーナー展において、それらの遺品を公開します。また、7月26日にはプレ企画として、手紙を実際に手にとつて整理するワークショップを開催します。

この他、歩兵第44連隊所属兵士の軍服や写真など、貴重な資料を公開し、歩兵第44連隊の歴史をひもといていきます。

さらに、関連イベントとして、9月29日には高知大学教授の小幡尚氏をお招きして、歩兵第44連隊の歴史についてさらに詳しく掘り下げる講演会を開催します。ご期待ください。



高橋正樹さんのお墓
(高知市土佐山)

講演会から（令和元年5月7日）

「木の民具 ― 箸にも棒にも柱にもかかる話 ―」

武蔵野美術大学教授 神野善治

◆木の民具を民俗学から考える

今いきている伝承をもとに歴史と文化を考えるのが民俗学の方法です。

文献を使う場合も、基本はそこに記された何代にもわたって伝えられてきた技と知恵で、ひとりひとりが伝えている情報を大事にします。話を聞き、できれば生活されている様子、特に技の場合は体験して、熟練した方の技と知恵を学んで記録し、それをもとに考えるのが民俗学だと思っています。箸にも棒にもかからないような分野から木の民具について考えてみましょう。

◆箸の話

木の民具といえば、例えばお箸です。普段使いの箸や菜箸、割り箸と、箸にも種類があります。箸には、いろいろなしきりも伝わっています。なめたり人に向けたりするのとは良くないとか、迷い箸といって、どのおかずをとるか迷うのも良くないといわれます。

日本では箸の個人使用が多いように思います。マイバシですね。一方、割り箸も使います。今は板を切って作っているため斜めに折れることもありませんが、本来は板を割って丁寧に作り、

目切れがしていないので折れにくいものでした。安物の家具より立派に作っているような割り箸を1回で捨てるのも日本の文化のあり方だと思っています。

箸を使ったら折る人がいますが、道具を捨てるときの習慣があるようです。城跡から中世の茶臼が出ますが、大抵割れています。捨てるときに割ったのではないかと思えます。道具を処分するときのマナーみたいなものも言い伝えとして大事だと思えます。

◆木のどこを使い、どう作るか

木の利用について、まずは木のパーツを考えてみましょう。果実の多くは食用にされ、渋い栃の実などは晒して栃餅にしました。漆の実からは蠟燭の蝋がとれます。漆は樹脂も利用され、塗物がよく知られています。丸太は柱材や刳物となるほか、割板や挽板で利用されます。繊維は糸になりますね。

今度は、木の民具を作る技術に注目してみましょう。曲物・刳物・指物・結物・編物などがあります。中世の絵巻物には頭に曲物を載せて水を運ぶ姿が出てきます。企画展『土佐・木の民具ものがたり』では大きい曲物が展示

されていて驚きました。普通、曲物は薄く割った板を曲げて作りますが、ケヤキの樹皮を剥いで大きな曲物を作る技術が、よく今まで残っていたなと。その工程の写真が展示されていました。が、とてもいい記録になりましたね。

刳物には、丸木船や水槽、挽物などがあります。挽物は轆轤で回転させて刃物で削り、椀や盆を作ります。木地屋が惟喬親王の繪旨を持って山を移動しながら作っていたといえます。指物は板を組み合わせる技術で、長持や箆筒などが作られています。

結物は板を結ってまとめる桶の類です。オケの「苧」は麻の仲間の苧で、それを入れる曲物が「け」で、オケやオンケといったのが語源のようです。苧の繊維を繋いで1本の糸にする作業を「苧績み」といいます。静岡県沼津で一本釣り漁師に釣り糸を作るところを見せてもらいました。

編物は、樹皮や薄いへぎ板を編む技術で、平らにも立体的にもなり、バッグも作れます。

◆木霊を送り、祀り込める

信仰面から木を見ていきましよう。静岡県は船おろしでは、船をひっくり返す「山の神おろし」をみました。船を3回半まわす地域もあり、三行半のように、木を統べる山の神に帰って

いただきたいのだろうと思います。

大勢で木や物を運ぶときには「木遣り」を歌って力を合わせます。海でも網を曳くときなどに歌い、ある漁師は木遣りを歌って他人の何倍も給料ももらっていました。自分の木遣りで10人が30人の仕事をすると。木遣りとは、山から里へ木を遣る、山の神を鎮めて木を送り出す歌だと思えます。

その一方で、船には船霊を祀り込めます。船大工が帆柱を立てるツツ柱に穴を彫り、男女一対の人形やサイコロ、五穀を入れて封をします。

家大工にはこんな話が伝わっています。大工が間違えて柱を短く切つてしまい、女房が軒と柱の間を斗供（組物）で補う方法を教え、むしろ立派な建物ができたという話です。とんでもないことに、大工は露見しないよう女房を殺します。それで女房を棟上げの度に祀り、祀らないと鬼門の方から女房の首が飛んでくるとか柱が歪むといえます。この話の女房とは家を建てる木、或いは木霊ではないか。建物を造るにあたって犠牲となった木霊を祀るというお話ではないかと考えています。

山形県では棟上式に棟上雛を屋根裏へ入れます。棟上雛や船霊は家や船の神であり、その正体は、大工が祀り込めた木霊ではないでしょうか。

（要約・文責 中村）



第10回岡豊山さくらまつり （土佐の食1グランプリ）同時開催

開催日：平成31年4月6日（土）～7日（日）

今年の高知県の桜の開花は平年並みの3月22日。いつもなら1週間から10日で満開です。「今年は葉桜まつりか？」と思っていたら、ミラクルなことが！29日に「満開日」となったあと、天候不順などで足踏み。そして「岡豊山さくらまつり」では、文字通りの満開の桜を楽しんでいただくことができました。当日は天候に恵まれ、暖かいを通り越して、暑い！アイスを買いたい列が伸びていました。2日間の来場者は9,500人。たくさんのご来場と、このイベントにご協力くださった皆様、ありがとうございました。（総務事業課）

第10回長宗我部フェス

開催日：令和元年5月18日（土）

今年も天気予報とにらめっこ。当日は昼頃から雲行きが怪しくなり、屋外でのステージイベントは幕間を短くしてお届けしました。南国市制60年記念出陣式では南国市長の発声に合わせ意気も揚がり、西日本では初公演の「破天航路」は音楽も殺陣も踊りも、それぞれが天下一品。それらがミックスされた圧巻のステージに魅了された人も多かったことでしょう。記念演武「戦国 beautiful」には、岡豊高校演劇部が出演。今年も県内外から、鉄砲隊や甲冑隊の援軍がありました。すべてのプログラムが終了するころ、パラパラと雨が。さくらまつりに続く春のミラクルでした。（総務事業課）



「れきみんの日」

開催日：令和元年5月3日（金）

5月3日は当館の開館記念日「れきみんの日」です。今年も盛り沢山なメニューや入館無料で皆様をお迎えしました。10日間の大型連休や晴天に恵まれ、昨年の人数を上回る809名が入館されました。



恒例の「れきみんクイズの陣」ではご参加の先着300名にオリジナルマグネットをプレゼント。今回初の「れきみん名品コレクション」展とスペシャルバージョンのミュージアムトークも楽しんでいただきました。企画展「土佐・木の民具ものがたり」の公開実演「土佐の大工と左官の技」は匠の技に感嘆しきり。大工さんと一緒にカンナで木材を削ったり、左官さんと漆喰を塗ったり、木のグッズ作りもあり、大盛況でした。バードカービングのワークショップや木の玉ボールなどのキッズコーナーも人気を集め、にぎやかな一日でした。（中村）

着任のあいさつ

学芸課長 西山 浩生



この4月から野本亮課長を引き継ぎ、学芸課長を務めさせていただきます。

館職員や地域の方のほか国史跡・岡豊城跡がある岡豊山の満開の桜に迎えられ、豊かな自然と歴史に包まれた中で息つく間もなく「岡豊山さくらまつり」「れきみんの日」「長宗我部フェス」と、県内外問わず多くの方々との出会いがありました。日々の中でも、地域に溶け込んでいる場であることを実感しています。また、「れきみんの日」のミュージアムトークや吸江寺での記念講話などでは、駆けだしのような拙い話に熱心に耳を傾けていただき、強く背中を押していただいているような感覚に包まれたことでした。

県内の歴史・考古・民俗の各分野における資料収集・保存、調査研究、そして長宗我部氏ゆかりの博物館としての役割を果たしていくとともに、これまでの学校教育の経験を生かし、歴史教育や体験学習の一層の充実を図るなど、県民の方々の幅広い学習活動の場として教育普及に努めていきたいと考えております。今後一人でも多くの方に親しんでいただけるような企画・展示をしていきますので、どうぞよろしくお願いたします。

学校団体等のご利用について



高校生以下は無料です。引率の先生方は利用届のご提出により観覧料が免除されます。展示見学に加えて、映像の視聴、展示室を回りながら答えるクイズプリントもご用意できます。勾玉作り・火おこし・甲冑体験・民家体験などの体験学習をご希望の場合は、事前に当館学芸課へご相談ください。(電話088-862-2211)

国史跡・岡豊城跡めぐり

毎週日曜日10時出発。Aコース(30～40分程度)、Bコース(60分程度)岡豊城跡を楽しみながら散策します。要観覧券。事前予約不要(荒天の場合、中止することもあります)

土佐のまほろばウォーク

10月23日(水) 土佐のまほろば探訪
南へ～山下の土居巡りコース
土居4ヶ所などを巡ります。
参加費：500円、定員 20名
申込受付：8月1日(木) 9時より

第14回

作品募集中

岡豊山フォトコンテスト

テーマ：岡豊山の春夏秋冬
募集期間：7月2日(火)～10月14日(月・祝)
(作品展示予定)11月28日(木)～1月19日(日)

岡豊風日(おこうふうじつ) 第106号
令和元年7月1日
編集・発行 (公財)高知県文化財団
〒783-0044 高知県立歴史民俗資料館
南国市岡豊町八幡1099-1
TEL 088(862)2211
FAX 088(862)2110
開館時間 午前9時～午後5時
休館日 年末年始12月27日～1月1日
臨時休館あり
観覧料 (通常展)大人(18才以上) 460円
団体(20名以上) 360円
(企画展)通常展 510円
団体(20名以上) 410円
無料：高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)
印刷：川北印刷株式会社

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

企画展 昭和から平成へ～くらしのうつりかわり～

7月19日(金)～9月16日(月・祝) 会期中無休

平成時代の終わりを機に、昭和から平成に至る生活の変化を、くらしの道具や流行した品々、懐かしい写真などを通して振り返ります。

●ワクワクワーク

「流行歌をレコードで聴こう」
7月26日(金) 11:00～12:00
要予約、先着50名

●ワクワクワーク

「民家体験!夏Version」
8月24日(土) 10:00～11:00
要予約、先着20名

●ミュージアムトーク

7月26日(金)・8月4日(日)・8月12日(月・祝)
各14:00～14:30 予約不要・観覧券要 講師：担当学芸員



水かき器
昭和50年代使用

コーナー展

陸軍歩兵第44連隊とその時代

8月1日(木)～10月14日(月・祝)

明治29年(1896)に誕生し、以後高知県の郷土部隊とされた旧陸軍歩兵第44連隊に関する資料を一堂に公開します。

●講演会 9月29日(日)
14:00～15:30
講師：高知大学教授
小幡 尚氏
要予約・観覧券要



乃木希典感状(松岡良一氏蔵 当館寄託)

れきみん! サマーミュージアム

～プレイバック昭和と「なつのこども」～

7月26日(金)/ 8月4日(日)/ 8月12日(月・祝)/
8月24日(土) 各日10:00～16:00

夏の企画展「昭和から平成へ」の会期中に開催。子どもから大人まで楽しめて、夏休みの宿題のヒントにもなる催しがいっぱい!懐かしのボンネットバス乗車体験もあります。詳しくは、当館HPにて。



企画展 開創700年記念

予告

吸江寺

10月4日(金)～12月1日(日)

昨年、高知市の吸江寺は夢窓疎石による開創から700年を迎えました。大切に守り伝えられてきた数々の寺宝を寺の歴史とともに紹介します。

夢窓疎石像(部分) 河田小龍筆 吸江寺所蔵